

第52回 日本の堤防防災は「203高地」か？

IT生

前回「災害情報（役所）無用論」と題して書いた。

今回は、論ではなく、「役所はいらない」と宣言する。

台風19号の被害により堤防が決壊した長野の千曲川では、堤防の仮復旧工事が終了した。この仮復旧工事はきわめて、珍妙なのだ。

もともと決壊する前と同じ「土堤防」（つまり決壊した堤防）をわざわざ同じ場所に仮復旧したうえで、内側つまり川側に、新技術である「インプラント工法」（鋼矢板を連続させた壁）による堤防を、外側の「土堤防」を囲むように仮復旧したのである。

現地の国交省の事務所にきくと、本格復旧が決った時点で、インプラント工法による堤防は撤去するという。従来の「土堤防」をどうするかは、決壊した原因の分析を待って、検討するという。



千曲川の堤防仮復旧工場の現場。右上が従来型の土堤防、左下方が新技術のインプラント堤防

インプラント工法は、東日本大震災の際、従来の堤防・防潮堤が津波で被災した現場で、びくともしなかったということで、飛躍的に堤防や防潮堤の復旧・補強工事に適用される事例が増えている。いわば、「決壊しない堤防」の登場である。にもかかわらず、千曲川では、わざわざ、インプラント堤防をつくりながら、それを撤去するのだという。

その背景には、「土堤原則」があるというのが通説だ。つまり、古来、日本でつくられてきた「土を積み重ねる堤防」に呪縛されているのだ。温暖化が進み、雨量が多くなって、毎年のように堤防が流されても、また同じ堤防をつくりなおし、また人命を危険にさらす愚をくり返している。まるで、日露戦争時の乃木大将による「203高地」である。日露戦争では、総参謀長の児玉源太郎が新兵器「榴弾砲」を投入してあっという間に203高地を攻略してしまった。

「インプラント堤防」が救世主となるのか、第二の児玉源太郎はいるのか。

千曲川の復旧の今後の展開は見物である。

(令和元年 11 月)